

けやき



No. 631
2024.5.9

京大職組
文学部支部

組合の安心感 川島隆

私は大学院を出てから定職を持たない非常勤講師として4年間働きました、それから契約一年更新の任期つき教員として4年半働いてから、京都大学に任期なし教員として就職しました。思い返せば、この大学に就職するまでの年月は、今よりも責任がなくて自由な身の上だった反面、将来が見通せないという意味では恐怖の連続でした。今、国は研究の活性化のためと称して、研究者の雇用の流動化を進めています。任期つきポストを大幅に増やし、すなわち将来に不安を抱えて研究に打ち込むのが難しい若手研究者を増やしたことは、ゆくゆくは日本という国の研究力の低下を招

きかねない悪手だったのではないのでしょうか。（かねてから、「選択と集中」の旗印のもとに、大学の基盤的経費を減らして競争的資金を増やす政策が推し進められた結果、論文数の減少という目に見える弊害が生まれました。それと似たようなことになるのではと危惧しています。）

京都大学でも、不安定な立場で働いている人たちが増えました。そんな人にとって組合の存在意義はとて大きいと感じています。雇止めやパワハラなど、働く人の心を踏みにじる事態は残念ながらゼロではなく、組合はそんな事態に遭遇した人の駆け込み寺のような役割を果たしています。組合には



知識と経験が豊富な専従の方々が常時詰めておられますし、法律の知識をお持ちの先生方もいらっしゃると思います。その安心感はとても大きいです。先に述べたように、私自身は安定した立場で雇用されていますが、就職して早々に組合に加入しておいて本当によかったと思っています。

私にとっての組合にいる最大のメリットは、「情報」です。巨大な組織である京都大学は、中

入ってしまおうと見通しが利かないので、教職員は自分が属している部局のごく狭い範囲で起こっていることしか分かりません。他の部局で何が起こっているのか、京都大学が今どちらへ向かおうとしているのか、その動きが自分にとってどう影響を与えるのか、そういったことを個人が知ろうと思ったら、必死で情報収集に励まなければならぬでしょう。しかし、組合に入っていれば、組合がアンテナの役割を果たしてくれるので、大学の中で迷子になることはありません。その安心感もまた他に替えが利かないものです。

時間雇用職員の方の声

京都大学教職員組合ならびに職組文学部支部では、時間雇用職員の時給昇給について取り組んでいます。4月に昇

上では少々小難しいことも書きましたが、今の組合がとてもアットホームで思いやりにあふれた場であることも最後に付け加えたいと思います。私が組合員になったところ、子どもがまだ小さかったので、組合の子育て相談・保育園入園相談を利用させてもらい、親身になって対応していただきましたし、イベントに子連れ参加させていただくこともあり、子どもは「きょうだいしよくそ」にすっかり馴染んでいました。最近では家庭の事情で組合の仕事は全然できていませんが、それで居心地が悪くなることもありません。この組合の安心感なるべく多くの人に味わっていただきたいと願っています。

給があったある職員の方より、次のような声をいただきました。

時間雇用の昇給について組合の方々が粘り強く交渉を続けていただいた結果、実現することになりました。今回の昇給は働く者として意欲を高めることに繋がると実感しています。組合活動でこの問題を取り上げ続けていただいた事、感謝しています。

文学部支部委員（～2024年6月）
伊勢田哲治 伊原木大祐 児玉聡（支部長） 米家泰作 杉江あい 谷川穰
※2024年6月に支部委員の半数改選（下線の委員）と支部総会が予定されています。



河島思朗 (西洋古典学専修)

西洋古典学を専門にしています。とくに紀元前後の古代ローマの文学、ラテン文学を中心に研究を行っていますが、広い視点からローマを扱うよう意識しています。古代の文学作品を理解するためにはローマの文化・社会・政治的側面の知識も欠かすことができないからです。また、古代の文学は神話を題材としています。そのためギリシア・ローマ神話も研究の対象になります。

京都に住むのは初めてです。長い歴史を感じる街並みや生活を楽しんでいます。一方で、歴史の中で培われてきた大学の状況は日を追うごとに難しくなっています。労働組合の活動はますます重要性を増していると感じます。

組合のみなさま、はじめまして。文学研究科社会学専修の岸政彦です。専門は社会学で、研究テーマは生活史と沖縄社会論です。2023年度に本学に着任いたしました。それまでは長いこと関西の大手私大にいました。そこでもいちおう組合には参加していましたが、形だけのもので、実際には組合が何をやってたか、まったく知りません。本学に来たときにこの点を反省し、もうすこし組合のお仕事もさせていただこうと思っています(仕事ができるタイプではまったくないのですが……)。

いま大学を取り巻く状況はますます厳しく、せせこましく、窮屈になっています。すこしでもこうした圧力をはねかえすことができれば、と思っています。よろしく願い申し上げます。



岸 政彦 (社会学専修)



ステファン・ハイム (社会学専修)

フランス出身で社会学専攻に所属しております。出身大学であるストラスブール大学学部生の時に、フランスとドイツにある自動車メーカーでアルバイトをしました。アルバイトの身分でしたので工場内の単純作業が主な仕事でしたが、正社員の職種別間の関係と労働状況の差を目にして自動車産業における労使関係に関心を持ち、今の研究に繋がっています。数年前から自動車産業における電動化が進み、各国の労使関係と労働状況が変化しつつあり、今はそのテーマに目を向けて、現場調査を行なっています。教職員組合に加盟したきっかけは、私の研究領域とのつながりもあり、公立大学における働き方の改革に協力できればと思っています。

松井直人 (日本史学専修)

2023年度から加入した日本史学専修助教の松井直人と申します。同年3月までは、京都府立京都学・歴史館という図書館・博物館・文書館が合体したような公立施設に勤務しておりました。専門は日本中世史で、特にその後半にあたる南北朝～戦国時代の京都の都市構造などについて、同時代の古文書・古記録(公家などの日記)を繙きつつ研究しております。

前職時には京都府の職員組合に加入しておりました。任期付職員だったこともありそれほど積極的な活動はできませんでしたが、構成員の方々の尽力により職場環境が実際に改善される場面を目の当たりにし、組合活動の意義と重要性を初めて実感いたしました。

昨年度からの京大での仕事としましては、文学部などが所蔵する日本史関係史資料の管理や教務補助などに従事しています。私が京大で院生をしていた頃の助教よりも仕事が増えている印象があり、想像以上に忙しい毎日を送っています。組合活動にもまだ本格的な参画はできておりませんが、今後、様々な場面でご協力できたらと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。